

教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告 久世文雄

幼児を対象にした社会化に関する研究および「児童の心身発達の追跡研究」は、ともに、現在、資料を検討している段階である。

また、青年心理の研究は、目下、中学生および高校生の社会的態度の検討を行なっている。

この1年間の成果は、以下のとおりである。

1. 勤労青年の自己開放性についての研究 名古屋市青小年問題協議会 昭和49年6月
2. 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(1) (速水氏と共同) 教育心理学科紀要 21巻 昭和49年7月
3. いわゆる過疎地域の家族関係(12)―離村者の追跡調査を通して― (過疎研究グループメンバーと共同) 教育心理学科紀要 21巻 昭和49年7月
4. 面接調査および調査法についての検討 續 有恒著「調査」 金子書房 昭和49年9月
5. 対人的反応特性、および家庭における人間関係 近藤貞次編 社会心理学 朝倉書店 昭和50年4月
6. 家族関係の教育心理学的研究―社会化を中心に― (小嶋氏、長田氏と共同) 教育心理学年報 第14集 昭和50年5月

研究経過報告 ― この一年 ― 丸井文男

1. 自閉児に関する研究

われわれの研究グループで、大学院生の研修を兼ねて自閉児の治療をはじめて以来、6年目になる。最近は、来訪する事例の80%まで、自閉傾向の子供達である。このような傾向は、一施設で、集中的にある研究がすすむと、常に起こる現象で、研究をすすめる上では、のぞましい傾向であるが、教育機関でもあるわれわれのところでは、もう少しバラエティのある事例が欲しいので、この点、やや偏りすぎるくらいが出てきている。一方、研究グループのメンバーは、年年増加し、現在20名を越える状況である。

1) 研究テーマの中心は、自閉児の発達過程による類型化の研究であるが、治療事例の追跡によって、漸く、その方向が明確になりつつある。

2) 自閉児の集団適応に関する研究は、本紀要21巻に第1報告を掲載したが、その後の経過について、追跡を継続中である。症児のすべてにおいて、入園期、あるいは、就学期になると、集団への参加の可否、いかなる学校へ入学可能なのかなど、重要な問題であり、第2報告をする予定である。即ち、最近、次第に、受け入れ側の理解が増しているが、教師の指導方針は、まだ極めて、未分化の段階にあり、われわれの究極のねらいも、この指導方針を少しでも明確化しうればと思っている。一方、

この分野の研究は、現場の教師との共同研究が必要であり、県立コロニーの養護学校の情緒障害児学級をはじめとして、県下にある自閉児を中心とする普通学校併設の情緒障害児学級および、特殊学級のなかに自閉児をもつ学級担任をふくめ、計7名の教師とわれわれグループとの共同研究班をつくり、昭和49年秋から、月1回の研究会をもちはじめている。ここでは、指導の実践経験と、本研究室での治療経験とを統合し、集団適応の研究の深まりと、ひろがりを探索中である。

3) 更に、第3の課題としては、自閉症候群の発生機序とその病因についての解明である。これには、現在までには、諸説があり、少なくとも過去10数年進展をみない。対人関係障害と言語発達障害とか中核症状であることはほぼ定説となっているが、これの発生因については、定かでない。これを症候群の精神病理学的な分析を個々の事例について得て行くことを試みている。

なお、1974年8月中旬から9月上旬まで、約25日間、ヨーロッパの8ヶ国の心身障害施設の視察団の団長として参加した。この間、私個人の目的は、自閉症研究のメッカであるウィーン大学のAsperger, H教授のもとと、ロンドン大学のRutter, M教授への訪問であったが、この2つの目的は、ほぼ達せられ、多くの収穫を得た。停年をあと2年にひかえた68才の老碩学 アスペルガー

教授は、大きな頑健そうな身体と厚い手で、あたたかく迎えてくれ、2日間に亘り、教室の若いスタッフや婦長達をふくめた討議に参加し得た。教授室や外来は、石造りの伝統を誇る古い建物にあるが、新しい治療教育の施設は、近代的な日本で普通にみられる建物の建設中のなかに九分通り出来上っており、これから、このKinder Klinikも飛躍をむかえる時期であったが、老教授の後継者がいないことをひとしく若い研究者は嘆いていた。われわれの言語発達の類型化の研究(1972)にはつよい関心を始し、いろいろな示唆を与えてくれた。ロンドン大学では、Rutter教授は、丁度不在で、集団適応研究の中心であるBartak博士が、丁寧に研究所内を案内してくれ、昼食をともにしながら、このグループの研究について討議の相手になってくれ、また、モーズレー病院

の名称の病室も案内してくれた。

認知障害説をとるWing教授のいるこの精神医学研究所は、一方、知的能力を可成り重要視しており、多くの共感をよぶ研究の方向性をもっている。

2. 精神健康に関する研究

数年来、マズロー理論を中心に、数名のグループで検討してきたが、ここ一年は、臨床事例について、彼の欲求階層説の実証性を中心に事例研究を重ねてきた。現在のところ、事例によっては、可成り明確に把握しうるものもあるが、一概にいけない面もある。またグループで研究した修士課程の山田克子君は、高校生、大学生を対象にして、質問紙調査を行い、因子分析によった結果は、マズローの理論をほぼ検証する成果を上げているとみとめることが出来た。

この1年の歩み — 昭和49年度 — 村上英治

1) この年もまた、心理臨床の諸領域にわたって、私なりの実践をつみ重ねてきた。この臨床の場で出会い、かわりをもった多くの人びとから、いかに私自身数えられてきたことであろうか。臨床における研究とは、こうした人びととの取り組みを離れたところでは、まったく意味をもたない。臨床実践即研究との視点を、常に忘れることなく、自戒の一端としていきたいと考える。

2) 私にとって第1の臨床実践の場としての医療臨床の領域では、前年度までの基本路線に沿って、今年もまた、精神障害者、特に精神分裂病者たちとの不断のかかわりをおして、彼らが分裂病を生きる、その生きざまを摸索しつつしてきた。ロールシャッハ法にもとづく現象学的接近は、依然私および私の仲間にとっての中核的課題であり、症例研究も重ねられつつあるが、一方、精神分裂病の基礎的過程を、根源的な意味での「個別化原理」の危機的様態であるところから、分裂病者の家族との距離を問題にしての探求は、大学院生池田らとの共同研究として、第23回東海心理学会大会(昭和49年6月)に報告され、さらにその後の症例を池田が加えることによって、本巻に「精神分裂病における“人間学的均衡”としての距離」と題する小論にまとめられた。

同様、この大会に、中京大学武田らによって報告された、ここ数年、八事病院における社会復帰病棟での実践は、さらなる具体的施策の提案をもあわせ、やはり本紀要に、「精神病者の社会復帰に関する研究(第2報)」として報告された。真の意味での自己実現を彼らに期待する志向性にもとづくものである。

3) 第2の臨床領域としての、障害児療育の場は、今日いよいよ重要な意義づけを私自身に賦与する。本年度また臨床棟の仲間とともに、重度障害幼児の母子通園、集団療育の場を提供することによって、この子たちなりの発達を援助していく努力をつづけてきた。それとともに年中行事ともなった、コロニーにおける教育研究実習では、この年はじめて、新しい療育実践の場として、「こぼと学園」が加えられ、18名の仲間とともに、障害児者とのかかわり体験を深める貴重な機会が得られた。紀要第21巻には、前年までの体験記録が、「重度精神薄弱児への人間学的接近(第4報) — 三たびケイ子と —」、「重度精神薄弱児への人間学的接近(第5報) — 発達するという —」と題して報告されたが、本年度の体験実践はそのあとをうけ、「重度心身障害児への人間学的接近(第6報) — 『こぼ』ある子と —」との標題のもと、まとめられ、本紀要に所載するところとなった。

精神薄弱児者の広く適応行動の発達をすすめる意図に沿っての、適応行動尺度の作成さらにその吟味は、今年度もその解説の上梓、また特殊教育学会などでの、統計的分析についての口頭発表などで展開されているが、この研究についての主導は、コロニー、発達障害研究所富安、愛知教育大学松田の手に委ねられた。私自身、しかしこの面からのアプローチにも期待するところ大きいことは今さら云うまでもない。

4) 第3の臨床領域としては、いわゆる学生相談活動をおしての実践が、私のやはり大きな柱でもある。昨